

火星



平成19年5月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

彼岸あと風の生まるるゑんど畑

春星をもつとも被る柚の木なり

椿落つる音聞きに来し法然院

囀に冷えてゐたりし鞍馬かな

方丈は衣かけながし花の昼
扇屋のガラス囲ひに夕桜
夜桜へふたたたび開かず白障子
空つぽの鶉小屋の隅の花埃
また夫の風邪ひいてゐる花ゑんど
どくだみの花の近くの孔雀小屋

太白星

柳生千枝子

白梅の初花ひらく誰に告げん
また一人親友が消ゆ花杏
ひかりつつ春の夕べの雲動く
通り過ぐ靴音ばかり蜩汁
真珠いろして早春の月上る
公園のぶらんこ晩くまで軋む
独り居てひとりに馴れし春煖炉

杉浦典子

網しぼりつつ舟寄れる日永かな
田楽を食べに朱の橋渡りけり

春あけばの舟の出でゆく音に覚め
春の虹オリブの枝の跳ね違ひ
桑畑に母の出てゐる日暮かな
紅梅や子犬を乗せてベビーカー
祖父の名の酒豪番付田螺鳴く

浜口高子

着ぶくれの頭を法の矢が掠め
出口違へて立春の西ひがし
雛飾るときをり道具箱探り
魚屋の水のしぶける雛の日
乗つ込みの沢風にいろありにけり
けなるさの鼻にも触れし大内雛
幣の縄真四角に張り初音かな

火星作品

山尾玉藻選

地虫出づ一本指のピアノ鳴り
白梅の花びらをどる取水桶
霾天や紐かけて売る碗や皿
スパイクの音の近づくクロッカス
風に鳴る吊唐辛子二日灸
霊山の下の畑を焼きゐたり
荃立の道に沿ひゆく熨斗袋
立春の土を返せば凭れ合ひ
海鼠桶人をしづかにやり過ごす
ねんごろの医師より貰ふ春の風邪
絵手紙の木瓜ひとつつ咲き初めし
信長の具足にクルス百千鳥
護摩の灰かぶりてのちの冴返る

八幡吉田島江
明石戸栗末廣
八幡丸山照子

夜回りの木の音のとどく雛かな
阿羅漢のおしくらまんぢゅう鳥帰る
杉花粉よく飛べる日の葬かな
通夜の灯を探す河内の朧かな
弔ひの水を流せし雪解川
鯨幕に椅子並べある春の宵
抱きあげて軽し朽木の春の猫
盆梅の苔に歳月とどまれり
やははれし鬼に乳首のぼつてりと
立春大吉嬰ぬれぬれの舌鼓
楸の木に刺の青める二月かな
如月や磧のあれば水流る
春立つやうがひ葉のうすみどり
教頭の大きなかばん水温む
紅梅や押しぐせのある認印
走り根に鬼の屈まる春の宵
よなぐもり猫の乳房のほひけり

大和郡山
城
孝
子

神戸
深
澤
鱻

八幡
大
山
文
子

選のあとに

山尾 玉藻

地虫出づ一本指のピアノ鳴り

吉田 島江

異常なほどの暖冬であった今年でさえ、啓蟄の日は厳しい寒の戻りがあった。気候が定まらない「地虫出づ」の候は、誰もが不安定な思いとなる。「一本指のピアノ」のひびきはいかにも頼りな気で、作者は落ちつかない思いを一層深くしたのである。同時作品へ白梅の花びらをどる取水桶へは、写生句の真髓とも言え、十七文字に凝縮された美の世界がある。

立春の土を返せば凭れ合ひ

戸栗 末廣

厄払いなどをし、「節分」の日はほのぼのとした境地となるものである。しかし現実にはまだまだ寒く、翌日の「立春」にはそんな思いも少し後戻りする。掲句「立春」とは言え畑の土はまだ固く、冷たく、鍬を入れると畑土は鋭角に「凭れ合ふ」ばかりである。微妙な季節感を捉えるころの眼が確かに働いている。そして、何よりも即物の強さを示している。

夜回りの木の音のとどく雛かな

丸山 照子

過日、作者と共に若狭街道の朽木を訪ねた。街道の仕舞屋風の軒端に、夜回り帳と拍子木を吊った棒が立ってかけてあった。作者はそれを旅人の好奇、心の対象で終わらせることなく、詩因として「雛」の世界へと昇華させたのである。この自在な発想が素晴らしい。「夜回り」「木の音」のモチーフは、鄙

びた町並を自ずと彷彿させ、古い雛の面輪をも偲ばせる。

弔ひの水を流せし雪解川

大山 文字

「弔ひの水」とは、葬儀に用意された杉桶の水であらう。葬儀も終わり、葬儀屋がそれを家の前の「雪解川」に流したのである。「雪解川」の躍動する水が、人を見送った静かな水を忍みに飲み込んで行ったのである。深く、鋭く、しかしながら静かに、命のはかなさを見詰める作者の眼を感じる。

涅槃図の巻かれてゆける鈴の音

大城戸みさ子

この句のいのちは「鈴の音」にある。例えばそれが、参拝者がたまたま鳴らしたお堂の鈴の音なら、そこに詩も真実も無いだろう。「涅槃図」には、涅槃に入る釈迦を囲み、弟子や菩薩、その上鬼畜までが嘆き哀しむ景が描かれている。それは静寂とも不思議とも言える世界である。作者がふと耳にした「鈴の音」も、巻かれて行く「涅槃図」から零れてたような、やはり静寂とも不思議とも言える音色であった、と読みたい。否、もしかすると「鈴の音」自体が作者の空耳だったのかも知れない。「涅槃図」とは、そんな不思議な思いを抱かせるものであり、それが「涅槃図」の在り様と考える。

白魚の桶に花街灯りけり

山田美恵子

「白魚の桶」と「花街」の灯と言う、二つのナイーブなものを取り合わせ、限りなく春の夕べの情趣を表出している。しかし、気分に溺れるところがない。ものに即して読むと言う作句の正道を、しっかりと踏んでいるからである。

恒星圏

同人 I

山本耀子

涅槃西風艦に濡れぬる箱めがね
神楽殿の瓦欠けあり雀の子
川幅は風筋野火の煙かな
ただ土手につつ立つてみて野火熾ん
野火果てし空の青さを仰ぎけり

丸山照子

吉田島江

盆梅に屏風の天地ありにけり
護摩の燠均して春の来たりけり
如月のましろき子福桜かな
啓蟄の節をあげる音なりし
ふるさとと指さす山の霞けり

鉄材のゆらゆら昇る目借時
紅梅の前も後も京ことば
茶箆笥の螺鈿の艶も梅二月
春立てり指の真珠のひとつぶも
桑芽吹く公民館のダンス音

山田美恵子

吉田康子

花水木昼を灯せる公民館
啓蟄やゆつくり紙を出す機械
かげろひに御堂のつづら開いてあり
春兆す汀を歩く鴉二羽
はりぼてのビリケンさんより春蚊生る

味噌桶に味噌仕込みをりぼたん雪
靄るとさらし鯨を買うて来し
飛火野の頭こげあるつくし摘む
女らのまつりの幟涅槃西風
金魚田のつちふる空の色となり

獅子座

山尾玉藻推薦

渡邊美保

なやらひの鬼の面より耳の出で
菜の花や隣の島の烟りをり
長靴に長靴が蹤く梅畑
菫咲く牛舎の昼の昏さかな

竹内水穂

陵守の機嫌そこねし蕨とり
忠魂碑に浪の音来る花なづな
ギブスから指の出てる春の暮
松葉杖の肩に降りくる春の塵

高橋芳子

嘯や十八キップの旅に在り
蓬草耳成山へ吹かれけり
嘯の降るバテレンの地獄絵図
山の湯の湯けむりを跳ね恋の猫

大城戸みさ子

助口弘子

緋毛氈うぐひす餅の粉こぼれ
家内に雛壇見ゆる舟の上
庭下駄に跳ね返りたる鬼の豆
ポップコーン出来たて受けし梅の風
母の家にけふの春日を入れにゆく
出てみれば雨になりたる牡丹の芽
ストローを離れて淋しシャボン玉
春しぐれ通りしあとの月であり

松山直美

豆撒の折紙の枡筆筒の上
泣き顔の点滴の子に桃咲けり
クレヨンの色買ひ足して春めけり
紅梅に歩を止めたれば木戸開き

蘭定かず子

菜種梅雨真珠の海へ漕ぎだしぬ
永き日の馬柵に掛けあるヘルメット
野焼見にゆけり鞆のななめ掛け
畦の花濡るる八十八夜かな